

令和 4 年 5 月 27 日現在

機関番号：11101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21997

研究課題名（和文）寺社縁起との比較に基づく能作品構築方法の研究

研究課題名（英文）Study on how to build Noh works based on comparison with religious literatures

研究代表者

中野 顕正（NAKANO, Akimasa）

弘前大学・人文社会科学部・助教

研究者番号：10882813

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、寺社縁起を題材とする能の作品につき、縁起説話の成立・展開史の中での能の位置を明らかにし、それら典拠縁起から能が構築される際の方法の解明を目指したものである。中でも、寺社縁起・宗教文学との関わりの深い黎明期・大成期の能を中心とし、奈良県 當麻寺の本尊「當麻曼陀羅図」の感得縁起を題材とする能《雲雀山》《當麻》、および香川県 志度寺の創建縁起を題材とする能《海土》について、特に検討した。その中で、これらの作品のもつ縁起展開史上の位置や、縁起の物語内容を換骨奪胎することでこれらの作品がいかなる意図のもとに構築されたのかを、明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本中世の宗教文学は、特定の寺院・神社や宗教宗派をめぐる物語として成立した後、芸能・絵画などの領域に取り入れられ、いわばメディアミックスされることによって、その物語は中世後期から近世頃になると広く人口に膾炙し、共同体の記憶・共同体の物語としての地位を獲得するに至る。そうした、中世の宗教文学が広く社会に流布する上で、特に重要な役割を果たしたのが能楽（謡曲）であったと考えられる。本研究では、この能楽を軸とする形で、中世的な宗教文学の世界が人口に膾炙していった過程を明らかにしたものである。

研究成果の概要（英文）：This study focused on Noh works on the subject of religious narratives. The purpose of this study was to clarify the position of Noh in the history of narratives and to clarify the method of making Noh from narratives. In particular, this study focused on Noh in the early and middle eras, which are closely related to religious literature. This study especially focused on three works. The first and second are "Hibariyama" and "Taema", which are based on the story of "Taima Mandala", the principal image of Taimadera Temple in Nara Prefecture. The third is "Ama", which is based on the story of Shidoji Temple in Kagawa Prefecture. This study clarified the position of these works in the history of narratives, and clarified the intention that these works were made based on the narratives.

研究分野：日本文学

キーワード：能楽・謡曲 寺社縁起 宗教文学 當麻曼陀羅（当麻曼陀羅、當麻曼荼羅、当麻曼荼羅） 中将姫 志度寺縁起 海土 東国下

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

日本最古の演劇である能は、元来、宗教教義や宗教説話を分かりやすく観客に伝えるための唱導劇として誕生した。従って、能作品、特に初期の作品について研究をおこなう上では、当時の宗教をめぐる言説との比較という手法を用いることが、有効かつ妥当と考えられる。

こうした、宗教言説との比較に基づいて能謡曲作品の分析を行うというアプローチ方法は、能が元来唱導劇であったことを思えば自明のことにように思われるが、実際には従来研究の遅れてきた、能楽研究の中ではむしろ傍流に位置するものであった。しかしその中で、1980年代に刊行された新潮日本古典集成『謡曲集』全三巻に代表される伊藤正義の仕事によって、そうした宗教言説を中心とする同時代の知的基盤の諸相を解明するための端緒が拓かれたことは、研究史上の大きな劃期となったと言える。

但し、こうした伊藤以来の能作品のもつ宗教的基盤の解明は、本来は作品成立時の構想により近づく形で作品理解を追究するという問題意識のもとに始められたものであったが、その後の研究の進展の中で、言説や資料の発掘に探求の焦点が大きく当てられることにより、ややもすれば却って個々の作品のもつ構想・作為性に対する関心を減退させ、作品の文脈に即した理解を妨げ、作品のもつ独自性を埋没させてしまうことともなった。

## 2. 研究の目的

本研究は、こうした伊藤以来の宗教的基盤に対する探究を継承しつつも、その上で、基盤と作品との間に横たわる異質性に注目し、基盤から作品が構想・構築されてゆく過程を解明することを目指すものであった。それにより、伊藤が本来目指していた、宗教的基盤の解明を通じた作品への肉薄という問題意識を、再び活性化させることが、本研究の目的であった。

このことは、日本最古の本格的演劇である能が唱導劇として誕生するに至った過程を解明するための、極めて重要な視座を提示するものと考えていた。いわば本研究は、能の発生過程の解明を最終目標とするものであったと言える。

## 3. 研究の方法

如上の目的のもと、本研究では、同時代の宗教言説の中でも特に寺社縁起(寺院や神社の創建等にまつわる説話物語)を取り上げ、寺社縁起との比較の中で能作品の位置を検討するという方法を用いた。具体的には、主として下記の2つの方法を用いた。

(1)縁起の物語展開の系譜を文献学的見地から解明することで、その縁起を素材としている能作品につき、縁起展開史上における作品の位置を明らかにする。

(2)縁起の能と大筋の物語内容が一致している作品につき、その両者の間での細部の差異を検討することで、能作品の構築方法を明らかにする。

このうち(1)の検討には、特に當麻寺(奈良県葛城市)の縁起を題材とする能《當麻》を題材として選んだ。それは、《當麻》については既に当時の宗教言説との関わりの中で作品主題の解明が進んでおり[中野 2017a・b]、當麻寺縁起じたいの系譜を解明することで、縁起研究と能作品研究との高次の接合が可能であると見込まれたためである。

また(2)の検討には、特に志度寺(香川県さぬき市)の縁起を素材とする能《海土》を題材として選んだ。それは、《海土》は寺社縁起に基づく能作品の中でも特に縁起物語の内容を大筋で踏襲した構成となっており、縁起と能作品との比較という手法が特に有用であると見込まれたためである。

### 【参考文献】

中野顕正 [2017a] 「能《當麻》の主題と構想」(『能と狂言』15)

中野顕正 [2017b] 「能《當麻》における宗教的奇蹟の空間造形」(『国語国文』86-8)

#### 4. 研究成果

以上の方法により、本研究では下記の成果を得ることが出来た。

まず(1)については、當麻寺における縁起の根本文献となった『當麻寺流記』が鎌倉期に成立するに至った過程を解明し〔中野 2021a〕、さらに流布本縁起『大和国當麻寺縁起』の成立と流布、室町前期頃に至るまでの縁起享受の実態を解明した〔中野 2021d〕、さらに、この検討の中で、當麻寺縁起の物語内容の中心に存在する本尊「當麻曼陀羅図」じたいの解釈・享受の諸相についても研究の端緒を得た〔中野 2021b・c〕、これらにより、當麻寺縁起の発生から能《當麻》の成立に至るまでの縁起物語展開史の全体像を網羅的・体系的に明らかにし、それによって能《當麻》のもつ文学史・文化史・思想信仰史上の位置および性格を解明することができた。

なお(1)に関連し、當麻寺の縁起を題材とする能には《當麻》のほか《雲雀山》があるが、《雲雀山》の素材となった中将姫継子譚（中世後期頃に當麻寺縁起中へ新たに付加された物語要素）の発生過程については本研究の中では十全な解明にまでは至らなかった。しかし、この物語要素の発生の端緒となった事象については、その形成過程を明らかにすることができ（成果未発表）、今後の研究の発展に向けての糸口を得ることができた。

また(2)については、志度寺の縁起文献『讚州志度道場縁起』との比較によって能《海土》の物語構築上の構想が明瞭に把握された。すなわち、能《海土》は一見すると『讚州志度道場縁起』をそのまま忠実に舞台化しているように見えるが、実は演劇として再構築する上で同時代の唱導における母子恩愛のテーマおよびその話型を採り入れ、更にそこに『法華経』の内容をも翻案投影することにより、原拠たる『讚州志度道場縁起』の筋を損なわないままに新たな主題を打ち立て、独自の世界を実現していたことが、明らかとなったのである〔中野 2022〕。このように、能の大成者・世阿弥の世代よりも遡る時期の能作品（所謂「古作」）において既に高度な演劇的構築の志向が確認されたことは、初期の能作品が有する劇的構想を再発見する上での重要な視座を提供するものとなったと考えている。

これらの点により、本研究を通して、寺社縁起と能作品との関係性の解明にとっての大きい有意義な知見が提示されたものと信じる。

#### 【参考文献】

- 中野顕正〔2021a〕「當麻曼荼羅縁起成立考」（『古代中世文学論考』43）  
中野顕正〔2021b〕「『當麻曼陀羅不審問答抄』の成立環境」（『仏教文学』46）  
中野顕正〔2021c〕「文龜本當麻曼荼羅の成立」（末柄豊・小川剛生編『室町戦国の文芸と史料』〔日本文学研究ジャーナル19〕古典ライブラリー）  
中野顕正〔2021d〕「中世前期における當麻曼荼羅縁起の系譜」（『都留文科大学研究紀要』94）  
中野顕正〔2022〕「能《海土》の構想」（高橋悠介編『宗教芸能としての能楽』〔アジア遊学265〕勉誠社）

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中野顯正	4. 巻 43
2. 論文標題 當麻曼荼羅縁起成立考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代中世文学論考	6. 最初と最後の頁 251-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野顯正	4. 巻 46
2. 論文標題 『当麻曼陀羅不審問答抄』の成立環境	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 仏教文学	6. 最初と最後の頁 119-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野顯正	4. 巻 19
2. 論文標題 文亀本當麻曼荼羅の成立	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 42-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野 顯正	4. 巻 94
2. 論文標題 中世前期における當麻曼荼羅縁起の系譜	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 都留文科大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 9-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34356/00000789	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野顕正	4. 巻 265
2. 論文標題 能《海土》の構想	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 118-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野顕正	4. 巻 43
2. 論文標題 仁和寺蔵『大和国當麻寺縁起』翻刻	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 弘前大学国語国文学	6. 最初と最後の頁 20-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野顕正	4. 巻 705
2. 論文標題 乱曲《東国下》小考 『東関紀行』との関わりを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鏡仙	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中野顕正
2. 発表標題 戦国期公家社会と當麻曼荼羅
3. 学会等名 中近世宗教史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中野顯正
2. 発表標題 光明寺蔵「當麻曼陀羅縁起繪巻」成立試論
3. 学会等名 蓮花寺佛教研究所研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------